大学がある まちの風景

日本工業大学が宮代町に開校したのは昭和42年、それから50年以上が過ぎています。沢山の学生が宮代町に通学し、下宿し、時には地域の活動で町民と汗を流し、語り合い、4年間を過ごしています。

現在の日本工業大学の学生数は約4,000人、その内700人ほどが宮代町に住んでいます。そして、学生たちは草の根で町民とつながっており、このことは宮代町にとっての頼もしい力になっています。

今回はそんな物語の一部を紹介します。

四月から下宿を始めます

大学があるまちの風景 2

宮代町でお弁当の宅配事業をしている秋野さんが空き家になった学生寮を見つけたのは昨年でした。

ずっと以前は日本工業大学の学生を対象にした「共同自炊型の学生寮」だった建物です。古いけれども、その古さが良さに変わっている「昭和レトロな建物」をいっぺんに気に入りました。

秋野さんは20代のころ、ドイツで料理の修行をした後、ヨーロッパ各地のシェアハウスに宿泊した経験もありました。その時、見知らぬ人たちが一つ屋根の下で生活し、食事をともにする経験は、若い秋野さんにはとても新鮮に感じられました。

宮代町出身の秋野さんは、子どものころから町に住んでいる日本工業大学の学生と触れ合う機会がたくさんありました。「大きなお兄さん」に連れられて大学の中を案内してもらったり、兄弟で一緒に遊んでもらった経験は今でも思い出すそうです。学生たちが遅くまで学校に残って勉強している姿も目にしてきました。

下宿を始める建物は日本工業大学から徒歩10分ほどの立地です。身代神社のわきを抜け、踏切を渡ると、すぐそこです。通信環境も整っているので、大学の学生だけでなく、若い社会人たちにも、ぜひ利用してもらいたいと思っているそうです。

朝夕の食事は秋野さんが作ります。いろいろな人が集まる新しい時代の「まかない付きの下宿」になったら素晴らしい、と秋野さんは思い描いています。

4月から秋野さんは「食事つきシェアハウス クラウド」を始めます。

各部屋はベッドの固定スペースに加えて陽当たり良好な7畳の洋室となっています

建物の玄関には秋野さんが世界各国を旅した時の地図や絵葉書が所狭しと貼られています

食事付き シェアハウス**QRAUDクラウド**の詳細は
QRコードからウェブサイトへ

学生たちのいつもの飲食店

大学があるまちの風景 1

荒川さんが大学通り商店街に飲食店(どさん子大将)を開業したのは昭和49年でした。当時は、大学の前の住宅地(現在の学園台)も造成中で、県道を工事車両が頻繁に往来していたそうです。

「そのころ私は25歳だったのよ」と奥さんは懐かしそうに笑います。店は日本工業大学に向かう県道に面しているので、今も昔も学生たちが荒川さん夫妻の作る定番定食を食べにやってきます。地方から来ている学生も多く、卒業してしばらくたってからひょっこりと訪れる卒業生も多いと言います。

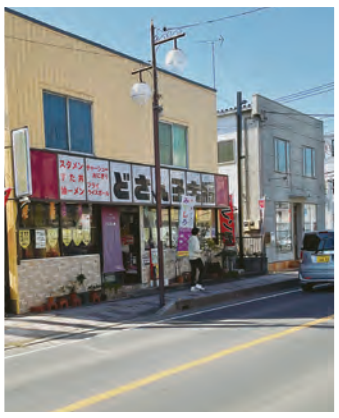
この日の夜、店にやってきたのは大学院生の舘洞(たてほら)さん。岩手県宮古市出身です。

舘洞さんは町内のアパートに下宿し、卒業後も大学院で2年間研究を続けてきました。テーマは震災後の防潮堤と地域づくり。課程を修了し、3月の卒業とともに帰郷するそうです。荒川さんのお店には週1回は立ち寄っています。ぐるる宮代でアルバイトをしているので、その帰りに寄ることが多いと教えてくれました。

もうすぐ4月、舘洞さんの郷里での新しい生活が始まります。そして、荒川さんの店の前を新入生たちが行き交います。

舘洞さんは6年間食べ続けた荒川さんの定食をいつか懐かしく思う日がくるのでしょうか。

「卒業記念に」と3人に並んでの写真撮影をお願いしました。



大学の地域連携センターは、町、東武鉄道、無印良品と連携し、一年の成果発表をかねた「トウブコの冬」という催しを1月21日に開催しました。(23P月刊みやしろに記事)

「地域活動にはとても興味があったので、今回は全てのプロジェクトに参加しました。とてもいい経験でした。」(佐藤さん)

「宮代町は、地域活動する人があちこちにいて、そんなところが良さになっているいい町だな、と感じました。」(尾崎さん)

学生よ町に出よう

大学があるまちの風景 3

日本工業大学では今年度から全学部、全学科を対象として「地域活動演習」という科目を新設しました。この科目で学生たちは学外に出て地域の人たちと一緒に考え活動します。

地域連携センター長の佐々木教授(上写真)は「知識だけでなく体験が必要、そのためには学生たちに外に出てほしいと思った」と動機を語ってくれました。情報メディア工学科の小林准教授とともに授業を企画しました。

「教室での授業は一方通行になりがちだが、地域の中に出ていくことで自律的な行動が生まれてくることに期待している」と佐々木教授。学生たちが取り組んだのは、農家の古い住宅を「民泊」に再生するプロジェクト、地域の皆さんを取材して上映する「宮代劇場」のプロジェクトなどです。

建築学科3年の2人も参加しました(下写真)。板橋区出身の佐藤さんは現在、本田のアパートに下宿しています。地域の皆さんと一緒に活動できるのはとてもよい経験だったと感じているそうです。「知り合った人たちと授業外でも、飲食店などで話をする機会が生まれた」と言います。

栃木県壬生町から通学している尾崎さんは、上映プロジェクトに参加。「教室で外部講師の話を聞くのと、現場に出て話を聞くのはまったく違う。より話が伝わってくる」と話してくれました。

佐々木教授は「学生たちが学科を横断して地域の皆さんと一緒に活動することで、自然に地域に溶け込めるようになれば」と期待しています。